

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：32629

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530177

研究課題名(和文)ドイツ政治外交史像の再検討 「伝統」と「革新」の視角から

研究課題名(英文)Re-examining the "traditions" of modern German foreign policy

## 研究代表者

板橋 拓己 (ITABASHI, Takumi)

成蹊大学・法学部・准教授

研究者番号：80507153

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近現代のドイツ政治外交史を、外交路線の「伝統」と「革新」という視角から再検討したものである。たとえば研究代表者の板橋は、西ドイツ初代首相のコンラート・アデナウアーによる「西側結合(Westbindung)」路線の歴史的基盤を分析し、「西側結合」路線が、それ以前のドイツ外交の「中欧」路線や「勢力均衡」路線の否定であることを明らかにした。本研究の成果は多岐にわたるが、たとえば板橋による『アデナウアー現代ドイツを創った政治家』(中公新書、2014年)などがある。

研究成果の概要(英文)：In order to (re-)examine the history of modern German foreign policy, we considered how the "traditions" were perceived or conceptualized by policy makers. Itabashi especially analyzed the historical basis of Konrad Adenauer's foreign policy ("Westbindung"), and found out that the "Westbindung" was a counter-concept of former "traditions" such as "Mitteleuropa" (Central Europe) or "Gleichgewicht" (balance of power). We published a number of books and articles, e.g. Adenauer-biography (Tokyo, 2014) by Itabashi.

研究分野：ヨーロッパ政治史

キーワード：政治学 国際関係論 外交史 西洋史 ドイツ

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者の板橋は、近代ドイツの外交路線の一潮流である「中欧 (Mitteleuropa)」構想の研究と、第二次大戦後のドイツ連邦共和国 (西ドイツ) の国是とされる「西側結合 (Westbindung)」路線の研究に従事してきた。

かかる研究を通して気付いたのは、ドイツ政治外交史における「伝統 (Tradition)」の重要性である。つまりドイツでは、自国の外交路線の歴史的「伝統」に対する意識および概念化が、ハイレベルの外交政策決定過程から、ジャーナリズムや世論における外交論議にまで、深く影響を及ぼしているのである。

重要なことは、かかる概念化された「伝統」が実体化し、続く時代の外交政策論議においても影響を及ぼす点である。それゆえ、近代以降のドイツ政治外交史の大きな流れを把握するには、概念化されたドイツ外交の「伝統」の内実を明らかにすること、そして、その「伝統」が後の時代の外交政策にいかなる影響を及ぼしているかを明らかにすることが求められる。

以上の着想から、本研究は、「伝統」と「革新」という視座から、近現代のドイツ政治外交史の巨大なうねりを描くことを試みた。

そうした作業にあたり、ドイツ政治外交史研究の深化の必要性を常日頃感じ、定期的に相互対話を行ってきた同世代の板橋拓己、飯田洋介、妹尾哲志、葛谷彩、河合信晴、北村厚 (全員がドイツ政治外交史の領域で博士号を取得) が、研究のインフラ整備とドイツ政治外交史の全体像の提示するための研究グループを組織した。本研究は、そうした日本における若手のドイツ政治外交史研究者のネットワークによる、共同研究の試みである。「伝統」と「革新」という視座も、相互対話から生まれたものに他ならない。

## 2. 研究の目的

本研究は、近現代のドイツ政治外交史を、

あくまで史料の実証的分析に基づきつつ、外交路線の「伝統」と「革新」という視角から再検討しようとするものである。本研究の目的は次の二つである。

(1) ドイツ外交に関する重要史料を収集・整理し、史料情報を研究状況とともに紙媒体及びウェブ媒体で公開することによって、ドイツ政治外交史研究のインフラを整備すること。

(2) 上記の史料研究を基盤にして、「伝統」と「革新」をキーワードに、近現代のドイツ政治外交史を体系的に把握する視座を獲得すること。

## 3. 研究の方法

本研究の基本的な研究方法は、重要一次史料・二次文献の収集・整理・公開、個別研究の深化、各研究の比較・総合である。なかでも本研究の特色は、少人数の組織による緊密な情報交換と相互対話である。ウェブを通じた日常的な意見交換はもちろん、全員が集まる研究会合を年2回、計6回行った (開催場所はすべて成蹊大学)。

組織内での各人の役割分担は、担当する対象時代順に並べると、次の通りである。

(1) 飯田洋介 (研究分担者) は、19世紀後半のビスマルク外交を象徴する「勢力均衡 (Gleichgewicht)」の内実を、のちのヴィルヘルム時代の「世界政策 (Weltpolitik)」における変容も視野に入れて検討した。

(2) 北村厚 (研究協力者) は、ヴァイマル共和国時代のシュトレゼマンの「協調」外交について、東西間の「ブランコ外交」という批判も視野に入れて検討した。

(3) 板橋拓己 (研究代表者) は、第二次大戦後の西ドイツにおけるアデナウアーの「西側結合 (Westbindung)」外交における「伝統」と「革新」の様相を検討した。

(4) 妹尾哲志 (研究分担者) は、1960年代後半から70年代にかけてのブランドによる

「東方政策 ( Ostpolitik )」における「伝統」と「革新」の様相を検討した。

(5) 葛谷彩 ( 研究分担者 ) は、20 世紀ドイツにおける外交論、とくに知識人・ジャーナリストらによる「外交論壇」のなかの「伝統」と「革新」の位相を検討した。

(6) 河合信晴 ( 研究協力者 ) は、東ドイツ外交の「特殊性」を検討した。

#### 4 . 研究成果

##### (1) 平成 24 年度の研究成果

研究会での理論枠組みと論点の共有。2012 年 7 月 21 日に第 1 回全体研究会合を開催し、研究代表者の板橋が「伝統」と「革新」をめぐる先行研究を整理し、理論枠組みを提示し、論点の共有を図った。次いで、2013 年 3 月 23 日に第 2 回全体研究会合を行い、研究代表者の板橋と分担者の葛谷彩が全体の枠組を意識しつつ、個別報告を行い、論点を深めた。

史料の収集と発信。研究代表者・分担者が協力して、ドイツ政治史関連の史料を収集した。とくにアデナウアー関連史料については、上述の第 2 回研究会合において、体系的にリストアップした。

研究拠点の整備とネットワークの形成。とくに、研究メンバー全員が参加するメーリング・リストとオンライン・ストレージを立ち上げ、史料や情報の共有を図った。

個別研究の深化。上記のように全体の問題意識をすり合わせつつ、各人が個別の研究を深化させた。たとえば、研究代表者の板橋による『『西洋の救済』(1)』(成果・論文) は、本研究にとっても重要な位置を占める。また、分担者の飯田と妹尾が参加した『欧米政治外交史 1871~2012』(成果・図書) も貴重な成果である。

##### (2) 平成 25 年度の研究成果

2013 年 8 月 27 日および 14 年 3 月 22 日に第 3 回および第 4 回全体研究会合を開催し、

飯田「新航路政策にみるドイツ外交の「伝統」と「革新」」と妹尾「ブランドの「東方政策」と対ポーランド関係」、および北村「シュトレーゼマン外交における「伝統」と「革新」」の研究報告と全体討論を行い、論点を深めた。

史料の収集と発信。とくに基本資料とアデナウアー関連資料については、整理して研究会ウェブサイトに掲載した。

研究拠点の更なる整備とネットワークの形成。上述のように、文献情報などをアップするウェブサイトを立ち上げた。また、日本国際政治学会やドイツ現代史研究会などでメンバーが積極的に研究成果を公表した。

##### (3) 平成 26 年度の研究成果

2014 年 10 月 4 日に飯田の研究報告を中心に、ビスマルク時代のドイツ外交について議論した。また、2015 年 3 月 22 日には本研究の成果の一つである北村『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想』の合評会を行った。

史料の収集と発信。たとえば板橋は、2015 年 3 月にコブレンツの連邦文書館 ( Bundesarchiv ) に赴き、外相ブレンターノの文書を中心に、アデナウアー時代に関する史料を収集した。また、ウェブサイトの文献リストも拡充した。

研究成果の公表。最終年度として、各人が研究成果の公刊を開始した。特筆すべきは、北村『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想』(成果・図書)、板橋『アデナウアー』(同)、飯田『ビスマルク』(同)、河合『政治がつむぎだす日常』(同)と、本研究会メンバーから 4 冊の単著が刊行できたことである。

#### 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

[ 雑誌論文 ] ( 計 16 件 )

板橋拓己、「戦後ドイツの「過去の克服」再考 日本が学ぶべき点は何か」、『外交』、査読無、29 号、2015 年、36-41 頁

妹尾哲志、「国境をめぐる国際紛争 冷戦期の西ドイツとポーランドを事例として」、『専修大学法学研究所報』、査読無、50号、2015年、41-52頁

板橋拓己、「ドイツとイスラエルの「和解」道義と権力政治のはざままで」、『アジア太平洋研究』、査読無、39号、2014年、111-127頁

( <http://repository.seikei.ac.jp/dspace/handle/10928/612> )

飯田洋介、「書評 鈴木楠緒子著『ドイツ帝国の成立と東アジア：遅れてきたプロイセンによる「開国」』」、『西洋史学論集』、査読無、51号、2014年、54-57頁

Aya KUZUYA, Bookreview Japan and Germany as Regional Actors: Evaluating Change and Continuity after the Cold War. By Alexandra Sakaki, *Pacific Affairs*, 査読無, 87 (2), 2014, pp. 339-341

北村厚、「シュトレゼマンの価値観外交 戦争責任とマイノリティ問題を中心に」、『社会と倫理』、査読無、第29号、2014年、81-91頁

河合信晴、「ドイツ民主共和国における余暇論 「自由な時間」から「余暇」へ」、『三田学会雑誌』、査読有、107巻3号、2014年、187-210頁

板橋拓己、「『西洋の救済』(2) 戦間期における「西洋(アーベントラント)」概念の政治化」、『成蹊法学』、査読無、79号、2013年、71-95頁

( <http://repository.seikei.ac.jp/dspace/handle/10928/413> )

板橋拓己、「書評：大原俊一郎著『ドイツ正統史学の国際政治思想 見失われた欧州国際秩序論の本流』(ミネルヴァ書房、2013年)」、『西洋史学』、査読無、251号、2013年、61-63頁

飯田洋介、「ビスマルクとルクセンブルク問題」、『史学研究』、査読有、281号、2013年、48-68頁

Tetsuji Senoo, A small step toward a 'German Europe'? Germany, the Ostpolitik and Europe, *Challenge of the 21st Century and the Region*, 査読無, 1, 2013, pp. 73-79

板橋拓己、「『西洋の救済』(1) キリスト教民主主義・保守主義勢力とヨーロッパ統合、1925-1965年」、『成蹊法学』、査読無、

77号、2012年、17-48頁

( <http://repository.seikei.ac.jp/dspace/handle/10928/273> )

板橋拓己、「書評：ジャン＝ジャック・ベッケール/ゲルト・クルマイヒ著(剣持久木/西山暁義訳)『仏独共同通史 第一次世界大戦』(上下巻、岩波書店、2012年)」、『西洋史学』、査読無、245号、2012年、51-53頁

板橋拓己、「『中欧』理念のドイツ的系譜」、『思想』(岩波書店)、査読無、1056号(特集「『中欧』とは何か? 新しいヨーロッパ像を探る」)、2012年、107-123頁

Tetsuji Senoo, The border issues of Germany during the Cold War: the meanings of Willy Brandt's Ostpolitik, *Asian Issues: Journal for Regional Asian Studies*, 査読有, 1, 2012, pp. 37-42

Tetsuji Senoo, 'If there is to be a policy of detente, then we will do it and not you': Willy Brandt's Ostpolitik and German-American Relations, *University of Tokyo Journal of Law and Politics*, 査読無, 9, 2012, pp. 81-91

[学会発表](計 31 件)

板橋拓己、「著者と語る『アデナウアー 現代ドイツを創った政治家』(中公新書)」、『日本記者クラブ 研究会、2015年3月27日、日本プレスセンタービル(東京都千代田区)』

板橋拓己、「書評：北村厚『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想 中欧から拡大する道』(ミネルヴァ書房、2014年)」、『西洋近現代史研究会、2015年3月21日、駒澤大学(東京都世田谷区)』

板橋拓己、「『西側結合』と『宰相民主主義』アデナウアー政治再考」、『関西政治史研究会、2014年11月22日、関西大学(大阪府吹田市)』

板橋拓己、「『過去』と政治 戦後ドイツにおける「過去の克服」から何を学ぶか」(中国語) 国際学術交流 成蹊大学法学部・北京大学国際関係学院学術交流討論会、2014年11月12日、成蹊大学(東京都武蔵野市)』

板橋拓己、「戦後ドイツからみる日本の課題」、『東京財団政治外交検証公開研究会、2014年7月8日、日本財団ビル(東京都港区)』

Yosuke Iida, "1864" in den Augen Japans, *Der Wiener Friede 1864 als deutsches*,

europäisches und globales Ereignis, 2014年10月17日 Friedrichsruh (フリードリヒスルー (ドイツ連邦共和国))

妹尾哲志、「国家とは何か、国境とは何か 国際法と国際政治から考える」、学生と市民のための公開講座『法律学と政治学の最前線』、2014年11月28日、専修大学(東京都千代田区)

妹尾哲志、「コメント：西ドイツの核政策」、ドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK) 公開ワークショップ「日独外務省政策担当者秘密協議と日本の核武装」、2014年11月17日、東京大学(東京都目黒区)

Tetsuji Senoo, Germany's Ostpolitik and the NPT under the Grand Coalition Government, Institute of International Politics and Economics, International Conference, "Major international issues in the 21st Century - from perspective of Japan and Europe", 2014年9月15日, Institute of International Politics and Economics (Belgrade, Serbia)

板橋拓己、「ドイツ語圏における「西洋の救済 (Die Rettung des Abendlandes)」というトポスをめぐって キリスト教民主主義・保守主義勢力とヨーロッパ統合、戦間期～1960年代」、ドイツ現代史研究会、2014年1月26日、キャンパスプラザ京都(京都府京都市)

板橋拓己、「書評：松本佐保『バチカン近現代史 ローマ教皇たちの「近代」との格闘』(中央公論新社(中公新書) 2013年)」、東京財団政治外交検証研究会、2013年11月26日、日本財団ビル(東京都港区)

板橋拓己、「ドイツとイスラエルの『和解』 道義と権力政治のはざままで」日本国際政治学会 2013年度研究大会 部会14「ヨーロッパのアジア・中東をみる眼」、2013年10月27日、新潟コンベンションセンター(新潟県新潟市)

板橋拓己、「戦間期のドイツ語圏における「西洋 (Abendland)」イデオロギーとその遺産」、戦間期研究会、2013年7月21日、東京外国語大学本郷サテライト(東京都文京区)

妹尾哲志「ドイツ分断克服への構想とブランド外交」、ドイツ現代史研究会 2014年1月例会、2014年1月26日、キャンパスプラザ京都(京都府京都市)

Tetsuji Senoo, Lessons from German

Policy of Reconciliation? Willy Brandt's Ostpolitik and its implications for Regionalism, Regionalism and Conciliation, 2013年9月9日, Institute of International Politics and Economic (Belgrade, Serbia)

妹尾哲志、「コメンテーター：「危機の年」と「ドイツをめぐる諸問題」 青野利彦著『「危機の年」の冷戦と同盟 ベルリン、キューバ、デタント、1961-63年』(有斐閣、2012年)をめぐって」、世界政治研究会、2013年5月17日、東京大学(東京都文京区)

板橋拓己、「『アメリカの社会科学』とどう向き合つか ドイツの国際関係論 (IB) の挑戦」、国際政治史研究会、2013年1月28日、慶應義塾大学(東京都港区)

板橋拓己、「ドイツとイスラエルの「接近と和解」 ルクセンブルク補償協定への道、1949-1953年」、成蹊大学政治学研究会、2012年12月20日、成蹊大学(東京都武蔵野市)

板橋拓己、「黒いインターナショナル? キリスト教民主主義・保守主義勢力とヨーロッパ統合、戦間期～1960年代」、世界政治研究会、2012年11月30日、東京大学(東京都文京区)

板橋拓己、「『西洋の救済』 ヨーロッパ統合史のなかの「保守主義 vs. キリスト教民主主義」、1925-1965年」、日本比較政治学会 第15回研究大会、2012年6月24日、日本大学法学部(東京都千代田区)

⑲板橋拓己、European integration history and its implications for East Asia、成蹊大学アジア太平洋研究センター主催・社会科学国際交流江草基金後援公開シンポジウム「地域統合の過去・現在・未来 ヨーロッパとアジアの比較から見えるもの」、2012年4月9日、成蹊大学(東京都武蔵野市)

⑳飯田洋介、「1867年におけるビスマルクの対米接近政策」、第23回西日本ドイツ現代史学会、2013年3月29日、東亜大学(山口県下関市)

㉑飯田洋介、「ビスマルクとルクセンブルク問題」、中国四国歴史学地理学協会 2012年度大会、2012年6月10日、広島経済大学 セミナーハウス成風館(広島県広島市)

㉒ Tetsuji Senoo, Revival of German hegemony in Europe?: Germany, the Ostpolitik and Europe, Institute for

International Relations, University of Zagreb, "Dealing with the regional challenges: Europe & Asia", 2012年9月13日, Zagreb (Croatia)

②⑤ Tetsuji Senoo, A new German hegemony in Europe?: German foreign policy and European Integration, Institute of International Politics and Economics, University of Belgrade, "Challenge of the 21th Century and the Region", 2012年9月11日, Belgrade (Serbia)

②⑥ Tetsuji Senoo, A small step towards a 'German Europe'?: Germany, the Ostpolitik and Europe, Faculty of Political Sciences, University of Belgrade, "Asia 2012 - Developments and Challenges and Promotion of the first issue of the CAFES's magazine Asian Issues", 2012年9月10日, Belgrade (Serbia)

②⑦ 妹尾哲志、「冷戦の変容とプラントの東方政策」,「冷戦秩序の変容と同盟に関する総合的研究 冷戦終焉の視点からの考察」研究会, 2012年8月11日, 国際教養大学(秋田県秋田市)

[図書](計 11 件)

河合信晴、現代書館、『政治がつむぎだす日常 東ドイツの余暇と「ふつつの人びと」』、2015年、総 326 頁

飯田洋介、中央公論新社、『ピスマルク ドイツ帝国を築いた政治外交術』、2015年、総 254 頁

Taro Tsukimura and Ivona Ladevac (eds.), Tetsuji Senoo, Institute of International Politics and Economics, Belgrade; Global Resource Management, Doshisha University, Japan, *Major International Issues in the 21th Century from a Perspective of Japan and Europe*, 2015, pp. 99-108

西田慎・近藤正基(編) 妹尾哲志、板橋拓己、葛谷彩ほか著、ミネルヴァ書房、『現代ドイツ政治 統一後の20年』、2014年、57-82、174-197、200-224 頁

Dusko Dimitrijevic, Ana Jovic-Lazic, and Ivona Ladevac (eds.), Tetsuji Senoo, Institute of International Politics and Economics, Belgrade; Global Resource Management, Doshisha University, Japan, *Regionalism and Reconciliation*, 2014, pp. 33-45

山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史(編) 板橋拓己ほか著、岩波書店、『現代の起点 第一次世界大戦 第4巻・遺産』、2014年、200-201 頁

板橋拓己、中央公論新社、『アデナウアー 現代ドイツを創った政治家』、2014年、総 240 頁

北村厚、ミネルヴァ書房、『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想 中欧から拡大する道』、2014、362

松尾秀哉・臼井陽一郎(編) 板橋拓己ほか著、ナカニシヤ出版、『紛争と和解の政治学』、2013年、216-233 頁

益田実、小川浩之(編) 飯田洋介、妹尾哲志ほか著、ミネルヴァ書房、『欧米政治外交史 1871~2012』、2013年、27-50、201-225 頁

飯田洋介ほか著、実教出版、『世界史 B 教授用指導書』、2013年、216-218、226-229 頁

[その他]

ホームページ等

ドイツ政治外交史研究会サイト(本研究の研究会情報や文献情報を集めたウェブサイト) <https://sites.google.com/site/takumiitabashi1978/kaken>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

板橋 拓己 (ITABASHI, Takumi)  
成蹊大学・法学部・准教授  
研究者番号: 80507153

(2) 研究分担者

飯田 洋介 (IIDA, Yosuke)  
岡山大学・教育学研究科・准教授  
研究者番号: 50506152

葛谷 彩 (KUZUYA, Aya)  
明治学院大学・法学部・准教授  
研究者番号: 90362558

妹尾 哲志 (SEN00, Tetsuji)  
専修大学・法学部・准教授  
研究者番号: 50580776

(4) 研究協力者

河合信晴 (KAWAI, Nobuharu)

北村 厚 (KITAMURA, Atsushi)